

■ 遙かなる 42.195km ■

雨の心配がない「金沢マラソン」は初めてかもしれない。コロナのために2年ぶり。私にとって通算10度目のフルマラソンだった。目標は完走メダルを手にする。イメージトレーニングはできていた。前半は無理をしない。後半の辛さは身に沁みて分かっている。余力を残して、気持ちよく走ろう。

走るのが好きかと聞かれれば、そうではない。断言できる。着替えて、準備が整っても、家族に「早く行ったら？」と言われるまでグダグダとしていて走り出せない。体が重いときは、ランニングの時間が近づくと気が滅入ってくる。

減量を目的に始めたランニングが日課になって15年以上が経つ。ほぼ毎日、今は年間で3000kmを走っている。楽しいからではない。いやいや走っている。いやいやながら走る理由は、終えた後にある。さしあたり、自分に課しているノルマの達成感。言い換えれば、嫌いなことから逃げなかったという自己肯定感がある。そして、シャワー後のうだうだ感が何ともいい。罪悪感なく満腹まで食べられ、熟睡もでき、風邪も引かなくなった。

走り始めた頃は、1日3.3km、20分程度。続けられることが重要だったので、年間でも1000kmでほどよかった。それが現在は3倍になっている。これにはちょっとびっくりしている。一般的に年齢を重ねると走力は衰えていくはずなのに、距離が延び、維持できていることは、新たな挑戦は可能なんだという希望にもなっている。

前半はこの上なく快調だった。気持ちは逸っていないのに、ペースは速い。しかし、それが祟ったのか、徐々に足が重くなっていった。残り10km地点で給食を摂り、走り出そうとしたが、足が壊れたロボットのように。リズムを整えて走り始めたものの、さらにペースダウン。この状態でまだ1時間以上も走らなければいけないと思うと気が遠くなった。この辺りから、歩く人が多くなって、沿道でストレッチをしている人もちらほら見える。

残り3kmを切り、ついに悪夢は我が身にも。左足のふくらはぎがピキリと痛んだ。つかけている。かばっていたら、今度は右足がピキリ。こうなっては、もう走っているのか歩いているのか分からない。しんどくて、辛くて、走り出しては止まりの繰り返し。残りの距離がいつこうに縮まらない。ゴールが遙か彼方に感じた。励ましになったのは、沿道とボランティアからのエールと同じゴールを目指す大勢のランナーたちだ。独りでは諦めてしまうようなことでも、支援者と仲間がいることだけで背中が押される。

「ゴールすればもう走らなくていい」。それだけを希望に、棒のような両足で、やっとの思いでゴールにたどり着き、帰り道で考えた。目標は達成した。だが、地元大会では自己最悪のタイム。思い通りにはいかなかった。来年は還暦を迎える。まだいける、いやもう限界かも。走ろうか、でも怖さもある。そんな思案を繰り返した。

でもきっと、好きでもないのに、苦しかったのに、こんなに疲れ切ったのに、来年もエントリーするのだろう。どうもフルマラソン魔力に取り憑かれてしまっているようである。